伝統文化で子どもたちに新しい経験を

今年度、最初で最後の晴れ舞台まで間近 ～梅の会 日本舞踊子ども教室～

梅の会 日本舞踊子ども教室の皆さん

成果発表の晴れ舞台 本番を前に一生懸命

吉身公民館で活動している「梅の会 日本舞踊子ども教室」では、園児から小学6年生まで12人の子どもたちが、日本の伝統文化「日本舞踊（日舞）」を楽しんでいます。

梅の会が発足して6年。例年は地域の敬老会などで踊りを披露する機会もありますが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響でお稽古そのものも数カ月休みとなり、発表する機会もなくなってしまいました。

2月に開催予定の「おさらい会」は、1年間の成果を発表する今年度最初で最後の晴れ舞台。招待する観客は例年より少ないですが、講師の花柳（はなやぎ） 梅月路（うめつじ）さんと子どもたちは久しぶりの再開を喜ぶとともに、本番に向けて懸命に稽古に励んできました。

梅月路さんは、つてをたどってそろいの帯を用意したり、アヤ棒や笠などの小道具を手づくりで用意するなど、晴れ舞台を精一杯楽しんでもらおうと工夫しています。

日舞の勉強にと発足 伝える楽しさに気づく

日舞を教える梅月路さんは、お母さんが日舞の名取（日舞の資格）だったこともあって、若いころから自然と日舞に親しみ、現在も京都まで習いに行っています。梅の会を始めたのも「子どもに日舞を教えることは、自分にとっても勉強になる」と考えたからでした。

梅月路さんは普段、市内のそろばん教室で先生をしています。そろばん教室に通う児童の保護者で、伝統文化「茶道」の先生でもある金子（かねこ） 由美子（ゆみこ）さんに協力してもらって、吉身公民館を借りて子ども教室を開きました。

当初は自身の芸を磨くためでしたが、浴衣姿でうれしそうに舞を楽しむ子どもたちの姿を見ているうちに、すっかり「伝える」ことの楽しさに魅了されてしまったといいます。

礼儀は厳しく、お稽古はちょっと厳しく、踊りは楽しく、休憩時間はみんなでわいわい

完璧じゃない先生が好き 礼儀も踊りも「楽しい」

日本の伝統文化はどれでも「礼儀」を大切にしています。

梅の会でも、稽古場に入る時は踊りの神様にあいさつをして入り、浴衣の着付けや片付けも自分でできるようになってほしいと考えています。

稽古の時には、梅月路さんが一緒に舞うことで細やかな所作を伝えています。美しい踊りの振り付けを覚えるのも大変。中には「学校でも、人に見られないようにしながら練習して覚えた」と話す子どももいました。

その代わり、休憩時間になると、子どもたちは「先生、きて～」と甘えて学校で学んだことを自慢げに話したり、目の前で腕相撲を始めたりしていました。

子どもたちは日舞の稽古や先生のことを「同じミスを繰り返すと怒られるけど、めっちゃ優しい先生」「厳しくて完璧な先生なら嫌になってやめているかも。いろんな教室と混同して先生も振り付けを間違えたりするところが好き」「激しい踊りではないし、ほかの人が踊っているのを見るのもきれいだし楽しい」などと話していました。

伝統文化を経験の一つに 仲良く稽古に精進を

日舞は伝統文化の中でも敷居が高いと思われがち。梅月路さんは、格式の高さなどは二の次にして、「礼に始まって礼に終わる日本の文化」や「伝統芸能の楽しさや美しさにふれる」など、子どもたちが成長の中で経験するさまざまなことの一つになれば良いと考えています。

梅月路さんは「お稽古の時もそっと所作を教え合っていたり、教室の子どもたちが学年に関係なく本当に仲良しなのがとにかくうれしいです」と目を細めて子どもたちを見守っています。

とはいえ、2月の「おさらい会」は間近。子どもたちが晴れ舞台で美しく舞えるように、と教える梅月路さんも自身の稽古に励んでいます。